

8月11日「しんどい方を選んでいく」Ⅰペトロの手紙3：13～22、ルカ福音書9：51～62

今、仮に私たちの教会に「イエス様を信じます！教会員になりたい！」と言う人が現われたら、皆さんだったらどうするでしょうか？もちろん大喜びするでしょうか！？ところが、イエス様はご自分に従おうとする者たちに対してこんな風に言われました。「**狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。**」「**死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。**」
「**鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない**」それぞれどういう意味か分かるでしょうか？1つ目は「狐や空の鳥にだって、寝泊りする場所くらいはあるけれど、イエス様にはあちこち飛び回らなければならないので落ち着いて眠る場所すらない」2つ目は「親の葬式は他の人に任せて、あなたは神の国を伝えなさい」です。3つ目は「宣教の旅に出ようとする者は家族に別れを告げる暇などない」ということです。どれも大変厳しい言葉です。従うことを願う者たちを歓迎するどころか、突っぱねてさえいるようです。これはもちろん、今を生きる私たちにも響いてくる言葉です。イエス様は私たちの献身の思いを歓迎してくださらないのでしょうか？そして私たちはイエス様から何を求められているのでしょうか？

これらの3つの言葉でまず気にかかるのは、すべてに家族が関係していることです。狐にも鳥にも穴や巣など帰る家がありますが、イエス様に従う者にはそのような場所がありません。親の死に目にも会えないし、家族に別れを告げに行くことも出来ません。これらは、イエス様の言葉として受け入れるにはかなり抵抗を覚えるかもしれません。あるキリスト教を装ったカルト宗教では、これらの言葉を利用してマインドコントロールをして家族や友人、周囲の人たちとの関係を全くとだえさせてしまうものもあります。本当に注意深く読む必要があります。

私たちにとって家族とはどういった存在でしょうか？最も小さな社会集団という言葉かもしれませんが、家族は最も基本となる生活の場です。私たちは家族の中で基本的な生活習慣を学び、他者と一緒に生きることを学び、愛し愛され、人を信じることを学びます。創世記でも「人が独りでいるのは良くない」と思われた神さまはアダムに共に生きるパートナーとしてエバを与えられ、そこに家族が産まれます。私は、「家族」はとても大切な存在だと思っています。

ところが、そのような存在なのに、むしろそのような存在だからこそ、家族がはらんでいる問題も大きなものがあります。『魂の殺人』と言う心理学者の本を読みましたが、

そこには重大な犯罪を犯した（猟奇殺人やヒトラーなどを含む）多くの者がその家庭に重大な問題を抱えていたこと、特に幼少期に親から愛されずに虐待を受けたことが書かれていました。今年も何度も悲惨な児童虐待の報道がありましたが、家族の抱える深刻さを思わされます。

私が、職員の聖書研究に関わっている善通寺の保育園には、全国でも先駆けて病児保育を導入しました。どうしても仕事に行かなければならない親に代わって病気の子どもを預かってくれる施設のことです。この病児保育を作るときに地域からどんな声があったと思いますか？「親が子どもの面倒を見なくなる！虐待を助長するのか！」「家族を壊すな！」そんな批判がかなり寄せられたそうです。実際には、本当に虐待するような親は子どもが病気でも気付かないか、放置するので病児を利用しません。また、保育園と医療機関が密に連絡を取り合うので、むしろ虐待などを早期に発見して防止する足掛かりにもなりえるのです。

先日の選挙でも家族のことは大きな話題になりました。ある番組の党首討論で夫婦別姓に前向きかどうかという質問に対して、首相だけが反対の姿勢を示したからです。それ以外にも LGBTQ（性的少数者）の方々に婚姻関係を保証する同性婚のことなど、今、家族を巡る状況は大きな分岐点にあると言えます。このような話題の時に、現在の家族制度を守ろうとする保守的な立場の方々から絶対に出てくる殺し文句があります。「伝統的な家族観が壊れる。日本が壊れる」家族には父と母が揃っていて、父は外に働きに出て稼ぐ、母は家事をして子どもを守る・・・「サザエさん」のような家族の一例が、さも家族として正統な在り方だと固定化され、そして異なった生き方を選ぼうとする者たちを認めなかったり、裁いて、排除しようとするのです。これは、私はとても危険なことだと思っています。それは家族の「神格化」です。聖書が最も嫌う偶像崇拜です。家族は本当に大切ですが、それゆえに時に家族は神聖視され、「神」になり替わるようなことさえあり得るのです。

キリスト教では、クリスマス話などで妻と子を守る強い父ヨセフと優しいマリア、そして幼子イエスを「聖家族」と呼び、理想の家族のように扱います。ところが、大人になったイエス様からはあまり聖家族を思わせる言動は見られません。マルコ福音書には、イエスの母マリアと兄弟たちがイエスを尋ねてきた時、イエス様は彼らを受け入れず追い返したと書かれています。それは兄弟達が「汚れた霊に取りつかれている」というイエス様への悪口を真に受けて連れ返しに来たからです。イエス様は家族に理解されなかったのです。また、これはあくまで仮説ですが、イエス様は実は父を早くに亡くしていたのではないかとも言われています。イエス様が大人になってからの物語に父ヨセ

フが全く登場しないこと、またイエス様が「マリアの子（マルコ 6：3）」と呼ばれていることからです（父親の名で「ヨセフの子」と言うのが通例であった。そう呼ばれないということは何か事情があったに違いないという指摘）。

イエスさまの時代にもやはり家族はある意味、神聖視されていました。家父長制のなかで男性である家長が最も大きな権力を持っています。そして、その制度からはみ出した者たち、家長の保護を受けられなかった者たちは社会からはみ出した厄介者、罪人として扱われていました。イエス様はそのような人達にも神の国を福音を伝えたのです。ヨハネ福音書 4 章にはイエス様が仲の悪かったサマリア人の女性と井戸端で語り合うシーンが描かれています。この女性は 5 回も離婚し、今は夫ではない者と一緒に過ごしている（訳アリの）女性でした。彼女は伝統的な家族観からはみ出した者でしたので皆が水を汲みに来る朝を避けてしか井戸に来られませんでした。そんなサマリア人女性にもイエス様は福音を告げたのです！

では、イエス様は家族をどのように考えていたのでしょうか？聖書にはこんな風に描かれています。**3：33～35** イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、**周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」**イエス様はある意味「家族」を拡大したのではないのでしょうか？あなたが共に過ごしてすべての人たちをあなたの家族として大切にしなさいと。最初の言葉は、家族を否定するというより、血縁のもの、同じ民族の者だけを家族とみなし、その関係に留まろうとする私たちへの促しなのです。その関係に留まるのではなく、困っている者たち、弱さを抱えている人達、たとえ敵対している者であっても目の前で助けを求めている人たちを隣人として愛する為に出て行くように私たちは促されているのです！そのような人達とこそ、家族になるようにとイエス様は私たちに伝えたのです！

この 4 月から、私は教会員のある方にとっても深く関わるようになりました。その方には身寄りがなく、教会しか頼る関係がない中で困っておられたからです。その中である面で他人を通り越して家族並みの責任を負わなければならないこともありました。本当に悩みましたが、イエス様からの促し、問いだと思い受け入れることにしました。そして受け入れたときに、その方との新しい関係に招かれたように思います。今、私たちの社会には同じようにいわゆる「家族」がなくなって困難を抱える人達が大勢います。そのような人達と私たちがどうやったら家族として歩めるか、神様から問われているのかもしれない。

イエス様に従うとは、そういうことです。私たちのもつ家族観を打ち破って新しい家族を創り出すことです。私たちのもつ隣人観を打ち破って、新しい関係の中に生きることです。ですから、イエス様の呼びかけに応えるのは本当に難しいのです。イエス様に従うのは非常にしんどいのです。

私は寝る前に祈ります。今日も一日平穩無事で幸せでした！感謝しますと祈ります。でも私たちが自分たちの幸せだけを願い求めるならば、それは信仰とは言えません。神社で無病息災家内安全のお守りを買うのと大して変わりはないのです！私たちは、イエス様からあえてしんどい方へと歩むことへと召されています。ペトロの手紙にもありました。

3：17～18 神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。キリストも、罪のためにただ一度苦しまれました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。

おそらくキリスト教会が経験した大きな迫害に対しての言葉だろうと思われます。私たちは正しいことのためならば苦しむ覚悟が必要だと。それはキリストも私たちの罪を赦すために苦しまれたからです。イエス様も言われました。

マタイ 7：13～14 狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。

信じるより信じない方が楽です。愛するより無視する方が楽です。赦すより敵を恨み怒りに身を任せるほうがはるかに楽です。そして今、私たちの周りにもそのように人々の対立をあおり、差別や偏見を助長させ、敵意の壁を築こうとする者たちの多さには驚きます。社会的に立場のある人達がそうなのです！でも、私たちはイエスを信じるのだから不信感よりも信頼し合う道を、敵意よりも赦しを、無関心よりも愛し合う道を選びとっていきたい。私たちはキリストからそういう道へと招かれているのです。平和を実現する者として呼ばれているのです！

この教会にも数年前から留学生や研修生の方々が来られるようになりました。本当にうれしいことです。あるクリスマスにその中の一人の方からメールをもらいました。「私は多度津教会と出会えて本当にうれしい。教会のことを日本の家族だと思っています。」クリスマスの疲れが吹き飛ばすくらいうれしかったことを覚えています。私たちが本当に難しいほうの道を選ぶならきっと神様は私たちの行く末を祝してくださいます。私たちには家族が増えていきます。そうやって平和への道を共に歩んでいきましょう！